

「或る『小倉日記』伝」考

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2020-06-12 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 木村, 有美子 メールアドレス: 所属:
URL	https://osaka-shoin.repo.nii.ac.jp/records/4470

「或る『小倉日記』伝」考

木村 有美子

はじめに

軍医である傍ら文筆家として、生涯二足の草鞋を履き通した森鷗外にとつて、小倉での赴任期間（明治三十二年六月～三十五年三月）は、どのような時代であったのだろうか。不本意な人事異動であったことは確かであるが、「不遇」「雌伏」の一言では片付けられない、次への飛躍の糧を得た時代でもあったのではなからうか。この鷗外の小倉時代を知る第一級の資料は、何といつても「小倉日記」であろう。ところが、この日記はその存在を知られながら、一時期所在不明となつていたのである。

鷗外の長男於菟氏は、第一次『鷗外全集』第二〇卷（昭和十二年五月三〇日 岩波書店）の「後記」に次のように記している。

第十二師団軍医部長として赴任してゐた時で、その「小倉日記」は私も見た記憶がある。それは本郷区千駄木町の観潮楼の一隅にあつた古い土蔵の中であつた。（略）この書庫の階下にあつた一つの小さい木箱は上下二段に分かれてゐて、（略）その本箱に一隅に、半紙に細い毛筆で叮嚀に認めた父の日記が数冊あるのを私は見出した。いづれも和綴で「独逸日記」もその中にあり、これは古びた水色の表紙であつたが、その外にやや新らしい茶色表紙のものが三冊あつて、これが小倉日記であつた。（略）この日記は後に小倉時代から父と親しく交はつた某氏が借り出してそのままになつたとの事で、その某氏は父に先だつて遠逝され、此度日記を刊行する際にも編輯者の方々はいろいろと骨折つて下さつたが遂に見出すに至らなかつた。

（略）明治三十二年より三十五年に至る四年間は九州小倉に

この「小倉日記」の所在不明を知つてその穴を埋めるべく、小倉

時代の鷗外の事績を調査した人物がいた。小倉在住の田上耕作である。同じく小倉に育った松本清張が、田上をモデルに、その生涯を描いたのが「或る『小倉日記』伝」である。

本稿では、清張がどのように実在のモデルを「小説」として作品化しているか、その方法を考察してみたい。

1 「或る『小倉日記』伝」発表前後の事情

松本清張の「或る『小倉日記』伝」の初出は、「三田文学」四二巻七号（昭和二十七年九月）である。同誌に掲載されるに至った経緯を説明するためには、デビュー作となった「西郷札」から説き起こさねばならない。

昭和二十五年、朝日新聞西部本社の広告部の社員であった清張は、「週刊朝日」が公募した「百万人の小説」に応募、その作品「西郷札」は三等入選を果たす。実は清張が特等であったのだが、朝日新聞社内の人間であったことを考慮して三等になったという。そのためか、昭和二十六年三月十五日発行の「週刊朝日別冊」春期特別号には、特選の深安地平「青春の旅」とともに三等ながら「西郷札」が掲載された。

清張は「『西郷札』のころ」の中で、

この入選作だけが雑誌に載ったというのがわたしの幸運であっ

た。そのために、その期の直木賞候補にもなった。木々高太郎氏に掲載誌を送ったのも、活字になったればこそである。ナマ原稿なら送る勇気はない。第一、その気持も起らない。「雑誌お送り下すってありがたく拝読しました。大そう立派なものです。そのあと本格もの矢つぎ早やに書くことをおすすめていただきます。発表誌なければ、小生が知人に話してもよろし。木々高太郎。」

と返信があったことを述べている。そこで、木々に、「記憶」（後に「火の記憶」と改題）と「或る『小倉日記』伝」を送ったところ、前者は「三田文学」昭和二十七年三月号に、後者は九月号に掲載されることになった。なぜ「三田文学」であったか。それは木々高太郎が「三田文学」の編集に携わっていたからである。「或る『小倉日記』伝」は初め直木賞候補となり、後に芥川賞候補に変更され、昭和二十八年一月、昭和二十七年度下半期、第二八回芥川賞を受賞した。五味康祐の「喪神」と同時受賞であった。

2 二つの本文

芥川賞受賞作が「文藝春秋」に掲載されることは現在と変わりない。清張の「或る『小倉日記』伝」も、「文藝春秋」三一巻四号（昭和二十八年三月）に「喪神」とともに掲載された。

しかし、その本文は、初出「三田文学」とは、かなり異なってい

る。清張は「自伝抄―雑草の実(18)」「読売新聞」昭和五一年七月七日 夕刊五面)に、「三田文学」に原稿を送った後、再度〈全文に手を入れて〉送りなおしたと述べている。

その書き直しの原稿は間に合わないで「三田文学」には原稿の原稿のが載った。それが芥川賞になったのだが、「文藝春秋」から再録を言ってきたときは、三田文学編集部に保存してあった二回目のほうを載せてもらった。だから「或る『小倉日記』伝」は、受賞作(三田文学)と、いま自作の小説集などに入れている文芸春秋発表のものとして二つある。

清張には「雑誌はゲラである」という言があるらしく、初出誌と決定稿との間の本文の異なる多さは定番となっているが、既に初期の作である「或る『小倉日記』伝」にもその傾向は見えてくる。⁴

山崎一類氏は「鷗外」六〇号(一九九七年一月)掲載の論文⁵で、「三田文学」と「文藝春秋」の本文の主な異同について論じている。

下表に、山崎氏に倣って両誌の相違点を挙げる。

「福岡日日新聞」の小倉支局長として九・一〇章に登場する人物は、「小倉日記」に同新聞の〈小倉特派員〉として名前が記されている麻生作男がモデルである。鷗外が小倉を去る際の送別会の発起人の一人でもあった。七章に登場する看護婦は「三田文学」

モデルとなった実在の人物名		「三田文学」	「文藝春秋」
主人公	田上 耕作	上田 啓作	田上 耕作
主人公の母方の祖父	白木 為直	白井 正道	白井 正道
主人公の父	田上 真素雄	上田 定一	田上 定一
主人公の母	友	ふじ	ふじ
主人公の友人	阿南 哲朗	津南	江南 鉄雄
小倉の医師	曾田 共助	須川 安之助	白川 慶一郎
鷗外の友人 玉水俊娥の妻	玉水 ハル (旧姓片山)	玉水 ハル(村山) (64歳)	玉水 アキ(片山) (68歳)
詩人・医師	木下 柰太郎	K・M	K 又は K・M
鍛冶町 家主	宇佐美 房輝	宇佐美	宇佐美
京町 家主	岩本	新魚町 土地所有者 東	新魚町 土地所有者 東
安広伴一郎の甥	安広 戌六	安広 実ちゃん	安広 実六
福岡日日新聞 小倉支局長	麻生 作男	麻尾 咲男	麻生 作男

実在の耕作の生年月日	「三田文学」	「文藝春秋」
明治33年4月24日	明治43年	明治42年11月2日

では「山内てる子」、「文藝春秋」では「山田てる子」と変更されているが、虚構の人物であろう。

山崎一類氏が指摘されているとおり、注目すべき異同としては、登場人物の名前、主人公の生年、八章の最後に付け加えられた森潤三郎からの手紙の部分の加筆を挙げることができよう。

その他、山崎氏の指摘以外の異同で気になるところを挙げてみたい。

① 誤解や悪意・矛盾を感じさせる表現の変更・削除

・四章では、主人公の風貌を見た者が〈白痴〉と見做したというところ、「文藝春秋」では〈白痴〉を〈痴呆〉と変更。(会話文の中で用いられた〈痴呆〉には「ばか」とルビがついている。)また、打算的に近づいたかのような印象のある〈須川に近づいていた津南〉という表現を〈白川を知っていた江南〉に変更。須川の〈温泉の研究〉が〈学位〉を取るためのものであるという記述を削除している。

・十章の主人公との縁談を断ったてる子の言葉は、「三田文学」では〈啓作さんのお嫁じや、わたしがあんまり可哀想だわ。〉だったものが、「文藝春秋」では、〈いやね小母さん、本気でそんなこと考えていたの。〉と変更され、明らかな侮蔑発言を省いている。

・五章の後半、ベルトランを訪ねる箇所描写、外国人らしさを出すためか、「三田文学」ではベルトランの発話を、〈モリさん〉〈キモノ〉〈ブッキョウのゼンガク〉等と所々を片仮名表記にしているが、「文藝春秋」では〈キモノ〉以外は平仮名になっている。これは、「若い頃日本にきて四十年以上も日本にいたから日本語は自在であつた」という記述にそぐわないからであろう。

② 耕作の目線からの描写に変更・心理描写の加筆

・四章の〈白衣の若い娘達はいずれも綺麗に見えた。〉を〈この女達をちら／＼見ること愉しみでないことはなかった。〉に変更。客観描写から耕作の目線からの描写に変更することで、耕作の心理を感じさせている。

・七章の中ほどには鷗外の旧居を訪ねる様子が描かれるが、「三田文学」では〈東という妓楼の亭主〉の「そんな古いこと調べて何になるのや」という言葉が〈澱のように残った。〉とあるところ、「文藝春秋」では、

そんなことを調べて何になる―彼がふと吐いたこの言葉は耕作に心の深部に突刺つて残った。実際、こんなことには意義があるのだろうか、空しいことに自分だけが気負い立っているのではないか、と疑われてきた。すると、不意に自分の努力が全くつまらなく見え、急につき落されるような気持になった。Kの手紙まで一片の世辞としか思えない。

③ 具体的描写の増加

忽ち希望は消え、真黒い絶望が襲ってくるのだった。このような絶望感は以後ときどき突然に起つて耕作が髪の毛をむしる程苦しめた。

と、耕作の「絶望感」について、加筆、強調しているのである。耕作の心の暗部については、四節「清張の手法」に後述する。

● 四章の須川が夜に美人の看護婦と散歩に出るという箇所は、「文藝春秋」では「美しい女達を引具して押し出してゆく長身の白川は悠然と人の注目をあつめた。時には耕作も一行のあとからついてゆくことがあつた。片足をひきずり、口を野放図に開けて涎をためて歩く耕作の恰好は一種の対照の妙である。人は必ず失笑した。が、耕作の才分を認めていた白川は気にもせずにつれて廻つた。」という記述が付け加えられ、耕作の身体的なハンディを白川や美しい女たちと対照することで具体的に強調して伝えている。些細なことだが、Q大までの距離を「汽車で二時間もかかる」、耕作がQ大へ通つた期間を「一年以上」と数詞を加えて具体的に示しているのも「文藝春秋」の本文のみ、蔵書数も「二万冊」から「三万冊近く」と変更している。

● 七章は、一章と対応する内容で、M・Kからの返信が示される章である。「三田文学」では、この返信の内容は、地の文に溶け込む間接話法を用いて描かれる。

④ 語り手による説明の削除

● 五章では、「三田文学」で

森鷗外は明治三十二年六月、九州小倉の第十二師団軍医部長に補せられた。中央から遠ざけられたという意味から遷であった。(略) 鷗外が小倉に来たときは年齢も四十前後に跨つた男ざかりである。赴任の初めは不平のあまり隠

このまゝで大成したら立派なものが出来そうです、小倉日記が不明の今日、貴兄の研究は意義深いと思うから、折角ご努力を祈ります、という意味のことが書いてあつた。

この部分、「文藝春秋」では、「返事は次の通りだった。」の後、書簡をそのまま写す直接話法が用いられている。

拝啓。貴翰並貴稿拝見しました。なか／＼よいものと感心しています。まだはじめのことで何とも云えませんが、このまゝで大成したら立派なものが出来そうです。小倉日記が不明の今日、貴兄の研究は意義深いと思います。折角御努力を祈ります。

K

同内容ながら、印象は随分違うのがわかる。訴える力があるのは書簡そのままを具体的に提示する後者の方だろう。

流などと号していたが、次第に上官の知遇を得て気持も和み、東京ほど多忙でないたため仏蘭西語や梵語を習ったりした。後の作品「二人の友」「独身」「鶏」に出てくるような風格で、その独身生活は簡素を極めたが、やがて母のすゝめる二度目の妻と結婚したのもこの時代だ。満三ヶ年に亘る小倉日記の喪失は、鷗外を知る重要資料の欠如として世の研究者から惜しまれてきた。

と述べたところを、「文藝春秋」では、

鷗外は明治三十二年六月、九州小倉に赴任した。(略)鷗外が小倉に来た時は、年齢も四十前という男ざかりである。その独身生活は簡素を極め、自ら後の作品「独身」「鶏」に出てくるような風格であった。その後、母のすゝめる美人の妻と再婚したのもこゝでだ。満三年間の小倉日記の喪失は世を挙げて惜しまれた。

と、簡潔に述べている。小倉時代に取材した作品から「二人の友」を省き、「小倉日記」の喪失を研究者レベルではなく「世を挙げて」の問題として強調しているのだが、ここで注目したいのは、小倉赴任を「左遷」とする判断を除いていること、更に、鷗外の小倉での生活ぶりを語り手が説明していた部分を削除していることである。これは、この作品が、耕作の苦労しな

がらの調査によって、鷗外の事蹟が徐々に明らかになっていくところに醍醐味があるからだろう。それを先取りする形で語り手に語らせてしまったのでは、魅力が半減する。清張が作品の語りを意識的であったことを感じさせる異同であろう。

⑤ 鷗外の妻が詠んだという歌の変更

・七章の終盤に、看護婦に案内されて広寿山の僧を訪ねる場面がある。この僧が記憶していた鷗外の妻が詠んだという歌は、

払子持つ 即非が像は背の君に

似たる笑いや 梅散る御堂 (「三田文学」)

払子持つ即非画像がわが背子に似ると笑ひし梅散る御堂 (「文藝春秋」)

と異なっている。「三田文学」の方は、二行の分ち書きでもある。鷗外の妻しげが詠んだ歌であるという典拠があるならば、歌に変更が加えられるとは思えない。しげの小説は「波瀾」「あだ花」等二〇編を⁸超すが、目に入った範囲では、このような歌は記されていない。大塚美保氏は、

私見では、この歌は〈採集記録〉ではなく、鷗外の韻文集『うた日記』(明治四〇春陽堂)「無名草」の部に所収の「払子とれる 即非が像の 背のきみに 似たる笑ひし

梅ちる御堂」にもとづくのではないか。これは、鷗外が与謝野晶子の歌風を模し、妻志げの立場を装って結婚前後の生活を詠んだ実験歌群中の一首。

と述べている。⁹しかし、この変更は、小倉市役所発行の『小倉』（一九五〇年五月）に掲載された歌に基づいていると考えられる。¹⁰これについては、「清張の手法」を論じる際に詳述したい。

⑥ 最終章における変更

最終章では、戦後の〈一層悲惨〉な耕作と母の状況が示される。〈食糧の欠乏〉が〈病状の昂進〉に拍車をかけ、インフレの激しさが家賃収入に頼るしかない二人を窮地に追い込んでいく。「三田文学」で〈終戦後、五年の間に数軒の家作は売られ、自分の住居も人に半分は貸して、母子は裏の四畳半の間に逼塞した。〉とあるところを、「文藝春秋」では〈数年の間〉に〈家作の全部は売られ〉〈三畳の間に逼塞〉と、深刻さを増す変更が加えられている。が、一番の変更は、△か、かあさん、えらい世の中になつたなあ。』といった耕作の「」で示される発話が全て「文藝春秋」では削除され、地の文に溶け込む形で示されていることである。「伝便」の音を聞く場面を一例として引く。

外の冷える静かな晩だった。今までうとうとと眠つたよ

うにしていた啓作が、枕から頭をつと持ち上げた。そして何か聞き耳を立てるような格好をした。

「どうしたの？」

とふじがきくと、

「鈴の音が聞えないかな。」

とかすかな声で云つた。

「鈴？」

「で、伝便の鈴だよ。」

といつて、その顔を枕にうずめるようにして、猶も何かきいている様子をした。冬の夜の戸外は足音もなかった。

その夜明け頃から昏睡状態となり、二日の後に息をひいた。（「三田文学」）

ある晩、丁度、江南が来合せている時だった。今までうとうとと眠つたようにしていた耕作が、枕から頭をふともたげた。そして何か聞き耳を立てるような格好をした。

「どうしたの？」

とふじがきくと、口の中で返事をしたようだった。もうこの頃は日頃の分りにくい言葉が更にひどくなつて、啞に近くなつていた。が、この時、猶もふじが、

「どうしたの？」

ときいて、顔を近づけると、不思議とはつきりと物を言つた。

鈴の音が聞える、というのだ。

「鈴？」

とき、返すと、こつくりとうなずいた。そのま、顔を枕にうずめるようにして、なおも何かきいている様子をした。死期に臨んだ人間の混濁した脳は何の幻聴をきかせたのであろうか。冬の夜の戸外は足音もなかった。

その夜あけ頃から昏睡状態となり、十時間後に息をひいた。（「文藝春秋」）

「文藝春秋」本文は、殆ど寝たきりの、発話もままならない耕作の状況を伝えることに成功しているだけでなく、〈死期に臨んだ人間の混濁した脳は何の幻聴をきかせたのであろうか。〉と語り手の叙述を挟むことで、末期の耕作を客観視すると同時に、抒情性をも獲得している。末期の耕作が聞いたものが、〈伝便の鈴〉の音だったことは読者には充分伝わるであろう。「或る『小倉日記』伝」の「文学性」を考える上でも、この最終章の異同は重要だと思われる。

「三田文学」と「文藝春秋」の異同は枚挙に暇がないが、紙面の関係上、このあたりでとどめておく。

3 実在の田上耕作の生涯と仕事

清張の「或る『小倉日記』伝」のモデル、田上耕作とはどのような人物であったのか。耕作は、明治三三（一九〇〇）年四月二十四日に、父田上真素雄（一八六一〜一九一四）、母友（一八六五〜一九四五）の長男として福岡県門司市で生まれている。母方の祖父は白木為直（一八二三〜一八八七）である。耕作には年の離れた二人の姉がいる。長姉縫（一八八四生）は官吏長谷川千蔵に嫁ぎ、次姉千代（一八八八生）は医師福村亀二に嫁いでいる。

因みに、耕作の姓田上は「たのうえ」と読む。光文社文庫『松本清張短編全集』一卷（二〇〇八年九月）所収の「或る『小倉日記』伝」では、「たがみ」とルビを打っている。「三田文学」「文藝春秋」「松本清張全集」三五巻のいずれの本文にもルビは見られない。光文社が「たがみ」と読む根拠は不明。

轟良子氏の「もうひとつの『小倉日記』伝」¹¹によると、耕作は〈幼少の頃階段から落ちたのが原因で、筋萎縮症の難病に生涯苦しんだ〉とある。〈階段から落ちた〉ことが「筋萎縮症」の〈原因〉になり得るのか、医学的なことは筆者には不明であるが、少なくとも先天的な異常ではなかったわけである。「筋萎縮症」といえば、宇宙科学の分野で優れた業績を残したホーキング博士を思い出す。博士も若くして発症、車椅子生活を余儀なくされたが、知的活動には影響しない疾患であることがよく分かる。一九七四年に厚生省により難病に指定され、現在でも有効な治療法は確立されていない。医療器具や電子機器の整わない時代に、そんな病を抱えながら研究・

調査をすることは大変であっただろう。

耕作は小倉の米町尋常小学校から小倉高等小学校を経て、門司にあった私立豊国中学校に進学。この、一九二二年初代校長西田幸太郎により開校された豊国中学校とはどのような学校であったのか、岩城之徳氏の「初期小説とモデル―「或る『小倉日記』伝」と田上耕作」¹²から引用する。

学校法人豊国学園創立五十周年に発行された記念誌（昭42・10・26）によると、同窓会長の小川又雄氏は（略）「初代校長が何等かの事情で公立学校に行けない子弟のために開いた私学校である。学力が足らず公立学校に行けなかった者、或は事情によって公立を追われた者、当時多かった朝鮮の人達、或は身体的障害に依って公立に入学出来ない者、それ等の人達の就学の道を開く為に設立された」と述べている。言語障害があり、小児麻痺に近い田上耕作が進学できたのもそうした学園であったからであろう。彼は大正九年三月第七回生として卒業するまでの五年間を、この豊国中学校で独特の自由主義教育を受け、自由にのびのびと成長したのである。

轟氏によると、豊国中学校入学時の保証人は二人の姉の夫（長谷川千蔵と福村亀二）であり、五年間の耕作の欠席日数は四十日であったという。卒業後はどうしていたのであろう。浜田良祐氏は、「小

倉のひとたち」¹³の中で、

病軀のため豊国中学校卒業後は独学で文芸を修め、漢詩和訳や随筆をかき、郷土史、短歌をつくり大正十三年には個人人文芸誌「郷人形」を発刊、杉田久女、斎藤瀧らの詩歌、短文をのせていた。昭和三年頃から歿年にいたる間は、特に小倉時代の森鷗外の調査研究に没頭、昭和十三年に鍛冶町の旧居に「森鷗外居住の趾」の標木を独立で建てたのは、率先鷗外の顕彰を行った美挙であった。（略）

なお趣味で祇園鈴、高浜人形など郷土玩具の創案をしている。（略）

と述べている。就職はしていないが、文芸を中心に活発な活動を行っていたことがうかがえる。ここにある「森鷗外居住の趾」の標木の建立は新聞（「大阪朝日新聞」北九州版 昭和十三年二月二七日）でも取り上げられている。

この記事で注目したいのは、〈田上耕作氏は「小倉における鷗外の研究家」として知られてゐる〉と書かれていることである。昭和十三年の時点で、小倉においては一定の評価を既に得ていたということであろう。耕作・清張両氏と親交のあった岩下俊作氏も〈小倉日記が世に現れる迄は田上君の在倉中の鷗外研究は私達仲間の権威であった。〉と述べている。¹⁴更に耕作が鷗外の事績を調査するだけでなく、〈遷りゆく時代とともに市民から忘れられがちとなる鷗外

居住の跡に永久に記念すべきしるべ」として標木を建てるといふ、積極的な行動をとることのできる人物であったことも覚えておかねばならない。記事には〈標木と田上氏〉の写真が添えられているが、その説明の後に、〈(下関要塞司令部許可済)〉と但書が付けられている。小倉が軍隊の街であり、軍事・防衛上の拠点の一つであったことをうかがわせるものである。後に引く耕作の「鷗外漁史の小倉観―広告塔と伝便」¹⁵中の、〈当時〉から〈小倉は軍人相手の都市であつた〉という言葉とも響き合う。

轟良子氏は、「田上耕作の鷗外顕彰」¹⁶の中で、

田上と豊国中学校以来の親友だった小倉の延本一雄氏の御子息からは、こんなお話を聞きできた。「耕作さんが亡くなる数日前、父と一緒に病氣見舞いに訪れたら、『あとをひきついで研究をやってくれ』と耕作さんから父が風呂敷包みを預かったのを覚えている」

その延本一雄氏も、昭和四十二年に亡くなられ、研究調査の資料と思われる風呂敷包みも、その行方はわかっていないようだ。

と記している。同様の記述は、岩下氏の前掲文にも見える。

永年に亘って書きためた鷗外先生に関する原稿は相当なものであつたといふ。戦争が激しくなつて(略)田上君はその原

稿が空襲で焼かれるのをおそれ、某寺院の住職が田舎に疎開するといふ話を聞いてその原稿の保管方を依頼したのである。田上君が死に、戦争が終つた。彼が生涯を賭けて研究した鷗外先生に関する原稿の行方を探したところ、某寺院の住職が原稿は預つた記憶があるが、いくら探してもその原稿はわからないといふことであつた。

小林安司氏の「芥川賞前後の松本清張さん」¹⁷中に、芥川賞受賞が伝えられた日、清張はヘモデルの故田上耕作の親友の小倉市米町妙法寺住職延本白水師を相手に作品の主人公の惨苦の生涯を静かに偲んでいたといふ。とあり、延本氏と某寺院の住職が同一人物であることがわかる。岩下氏は、原稿が紛失した今、〈田上君の鷗外研究はどの程度のものであつたか永遠の謎となつてしまった〉とも述べている。この証言が真実ならば、耕作の行つた「仕事」を知るには、わずかに現存する活字化されたものを見る以外にはない、ということである。

では、耕作の遺した文章を見てみたい。山崎一穎氏によると、耕作は郷土誌「豊前」¹⁸にいくつかの文章を寄せているという。

「豊前」二号(一九三五年十一月)『小倉の姉様』

郷土玩具 紙人形「姉様」の紹介。

「豊前」七号（一九三七年二月）Ⅱ『巷に聞く』

「寄生木 天狗の残骸 見ら

れざる牢獄 きんたま坂 摘

髮所 寄食 細帯結婚 法雲

の葉」等の郷土挿話の紹介。

山崎氏は〈鷗外との関連〉から「豊前」七号掲載の「摘髮所」を紹介している。

摘髮所

理髮店の看板も時代の移りに従つて多少の変遷があると思われる、これは一戸務氏に依つて未発表の鷗外遺稿が出た。その郷土手記の中に、

「摘髮―小倉にて髪を切るを摘むといふ招牌に摘髮所と書す」とある明治三十年代は小倉地方では「摘髮所」と看板を掲げてゐたものらしい。

それが近代では理髮店と書きその上理髮だけでは物足りないと思つて高等とか美容とかの文字を頭につけてゐるが又近來は調髪と記してきた。だが変らないのは言葉で鷗外博士が四十年前手帖に記された通り我々は矢張り髪を摘んで下さいと言つてゐる、たいした事ではない。

他に、耕作の鷗外に関するものとして「鷗外漁史の小倉観―広告

塔と伝便」がある。掲載された「福岡」は有吉憲彰編集の福岡の郷土誌である。少々長いが、次に引用する。

「鷗外漁史の小倉観―広告塔と伝便」

森鷗外博士が近衛師団軍医部長から小倉師団軍医部長に転任されるに際し「鷗外漁史を葬るの記」を読売新聞へ寄せ左遷の不平を抱き都落ちされたのは明治三十一年六月であつた。徳山から船で門司に上陸し、九州鉄道で未見の地小倉町へ向はれた。

「段々小倉が近くなつて来る。最初に見える人家は旭町の遊郭である。（略）がらがらと音がして、汽車が紫川の鉄道橋を渡ると、間もなく小倉の停車場に着く。参謀長を始め、大勢の出迎人がある。一同そこそこに挨拶して、室町の達見といふ宿屋にはいつた」とは創作「鶏」の一節である。之が小倉生活の第一日六月二十四日で、三十五年四月二十一日まで満三年間の事は「鶏」「独身」「二人の友」に詳細に描かれ、郷土研究としては「和氣清磨と足立山」「即非年譜」「安国寺古塚記」等があるが、本号では鷗外氏が淋しい小倉の町から、特異な郷土色を見出されたものと三十年前の小倉の時世を語るものとして「鶏」と「独身」の中から抜文して見るに停めよう。

先づ達見旅館の女将の世話で翌日鍛冶町へ家借りに行く。

「鍛冶町に借家があるといふのを見に行く。砂地であるのに、道普請に石炭屑を使ふので、薄墨色の水が町を流れてゐる。借家は町の南側になつてゐる。生垣で囲んだ相応な屋敷である。……垣の方に寄つて夾竹桃が五六本立つてゐる。」「東京から来た石田の目には先づ柱が鉄丹か何かで、代楮のやうな色に塗つてあるのが異様に感ぜられた。併し不快だとも思はない。」爺さん（家主）は生垣を指さして此辺は要塞が近いので石塀や煉瓦塀を築くことはやかましいが、表だけは立派にしたいと思つて聞合せて見たら、低い塀は築いても好いさうだから、其内都合をしてどうかしようと思つてゐる。と話した」（鶏の中から）とあり、鍛冶町の借家とは今の太田病院の南角にあたる屋敷で、今では家主も家屋も變つてゐるが夾竹桃は二三本残つて夏になると紅い花を見せてゐる。それから小倉の家屋は昔からの家は総て赤い鉄丹が塗られて白木造の建物は見受けられない。之は小倉地方の特有なものらしいが近年の新築のものになると塗らなくなつて来た。それで町を通つて塗つてある無いに拠つて家屋の新旧が判るわけである。次に面白く思はれるのは明治三十年頃煉瓦や石造の家や垣を築くことを陸軍側から許さなかつたことである。最も當時は日清戦役は終つても又もや日露の戦雲たゞならぬ時で殊に小倉は軍人第一主義であつた。従つて鷗外氏の見ると「小倉は人氣が悪くて、物価が高い。殊に家賃を始め将校の階級によつて価が違ふのは不都合である」と書かれてある位

で、当時の小倉が軍人相手の都市であつたことは謂ふまでもない。

此年の冬近くなつて鍛冶町の寓居から新魚町の「津田倉」の前、現在は金光教会になつて居る家に移転された。此の家の事は「独身」の中に書かれてあり、安国寺の玉水俊號和尚が出入しだしたのも新魚町の家からである。毎夕の散歩も平凡な小倉の町には行くべきところもなかつた。旭町裏の御台場の材木の上から常盤橋の欄干に夕涼みをされる外仕方がなかつた。

夕風に袂すゞしき常盤橋上りの汽車はなほ妬かりき

時には橋上でのノスタルジアも起つたのであらう。寂しい城下町に鷗外博士の眼に特異な文化風俗を二つ認められた。それはこの常盤橋の広告柱と町をぶらついてゐる伝便屋であつた。（以下略）

※文中に、「安国寺古塚記」とあるが、正しくは「安国寺古家の記」。筆者注。

鷗外の「独身」の冒頭には、耕作が記した〈広告柱〉と〈伝便〉が、〈小倉へ西洋から輸入せられてゐる風俗〉として紹介されている。どちらも小倉独特のものであるためか、鷗外はその効用についてかなり詳しく〈講釈〉しているし、「塵塚」¹⁹の中に、「伝便」について〈小倉の使丁なり。鐸を鳴して往く。一便四銭とす。〉と記してもいる。

右に引用した耕作の二つの文章を見ると、耕作が鷗外の作品及び関連資料をかなり詳しく調査・研究していたことがわかる。

「豊前」七号掲載の「摘髮所」中に「一戸務氏に依つて未発表の鷗外遺稿が出た。その郷土手記の中に、「摘髮―小倉にて髪を切るを摘むといふ招牌に摘髮所と書す」とある。当時、これは全集にも載っていない、最新の情報であつたはずだ。現在ではこの手記は、「塵塚」と名付けられて、『鷗外全集』三七巻に収められているが、おそらく耕作は、岩波書店の第一次『鷗外全集』四巻付録の「月報」に掲載された、一戸務氏の「鷗外先生の蔵書」を読んだのであろう。「鷗外漁史の小倉観―広告塔と伝便」も、引用された「鶏」「独身」は言うまでもないが、冒頭には「鷗外漁史を葬るの記」、末尾近くには「夕風に袂すゞしき常盤橋上りの汽車はなほ妬かりき」という歌が引かれている。前者は全集未収。所在を確認できないまま、筆者は未見である。後者は、『うた日記』（一九〇七年九月 春陽堂）の最終章「無名草」所収の歌である。『うた日記』は日露戦争に従軍中、詠んだ詩歌をまとめたもので、この歌は小倉時代を回想して詠んだと思われるものである。「三田文学」と「文藝春秋」の本文の異同の項で、大塚氏の指摘にあつた「弘子とれる即非が像の背の君に似たる笑ひし梅散る御堂」の四首後に掲載されている。耕作の鷗外研究に関しては、何といつても遺された資料数が少なすぎて実力のほどは判断しかねるが、右の仕事を見る限り、文献を精査し、自分の足で鷗外の事績を確認するタイプの研究者であつたことは間違いないであらう。

さらに、耕作の仕事の一端を知る資料として、森潤三郎氏の『鷗外森林太郎』の記述、吉野泰平氏指摘の鷗外全集刊行会版『鷗外全集』の「月報」²⁰を挙げておきたい。

鷗外の末弟、森潤三郎氏の『鷗外森林太郎』（一九四二年四月丸井書店）の「沈黙時代」の章に小倉時代の鷗外についての記述がある。そこに耕作の名が挙がっている。

小倉市博労町の田上耕作氏は、在住中の兄の事蹟を調べて居られるが、昭和十三年二月二十六日鍛冶町の旧居で、現在大八木喬輔氏の邸となつてゐる門前に『森鷗外居住の趾』の標木を建てられた。此処に挿入した写真は同氏から寄贈されたのである。

これを見ると、潤三郎氏に耕作自らが写真を送付したということである。また、鷗外全集刊行会版『鷗外全集』の「月報」二号（一九二九年七月一〇日）所載の「編輯部より」には、「各地の読者からは、編輯部に向けて編輯の注意及び希望、前版の誤植、佚文の報告等が殺到して、編輯部ではその熱心に刺激せられ、頗る緊張して仕事に従つて居る。（略）聊か感謝の意を表する。」とあり、読者から送られた意見を簡条書きにして紹介している。そこに「三、小倉の田上耕作氏は小倉在住時代の著作に就きて注意された。」と耕作の名が見える。どのような「注意」を行ったかは不明だが何らかの発信を行ったものと見える。

標木を建てるという行為もそうであるが、潤三郎氏や全集の編輯部にも、積極的に働きかけていた様子が読み取れる。

このような活躍を見せた耕作の晩年について、岩城氏は、前掲論文で次のように記している。

田上耕作は晩年病いが進んだため、母と共に姉千代の婚家である門司市の医師福村亀二の家に身を寄せていたが、昭和二十年六月二十九日米軍の空襲で爆死した。それは終戦に先だつことわずか四十七日前のことである。耕作の法名は通遠院日耕居士、墓は福岡市天神の勝立寺にある。

朝日新聞西部本社で清張と同僚であり、作家でもある安田満氏は、

現実の田上耕作氏の死については、太平洋戦争の敗戦間近の昭和二十年六月二十九日、北九州が米軍機の空襲を受けたさい、門司の街頭で倒れ、通りがかった水兵が助けようとするのを、自分は不具者で助からぬ、ほかの人を助けてやってくれ、と言って死んだと、最期の様子が伝えられている。

この話は美談だが、話の出所がわからぬ。病身の田上氏が、何のために門司に行ったのかも不可解だ。それにこの最期はあまりに痛ましい。

と述べている²¹。安田氏は耕作が門司の姉の婚家に身を寄せていたこ

とを知らなかったようだ。耕作の死をめぐる逸話の真偽は不明であるが、このような〈美談〉が伝わる程、耕作の死は当地の人々に悼まれたということなのだろう。享年四十五歳であった。

4 「或る『小倉日記』伝」清張の手法

この実在の田上耕作の生涯を、清張はどのように作品化していったのか、事実との相違点、清張の創作意図について考察したい。まず、実在の耕作の生涯と作中の設定との相違点を概観したい。上が事実、↓の下が作中（「文藝春秋」の設定である）。

① 生誕地

福岡県門司市（生育地は小倉） ↓ 熊本（生育は小倉）

② 生年月日

明治三十年四月二四日 ↓ 明治四二年十一月二日

③ 両親・祖父

父 田上真素雄 ↓ 田上定一

母 田上友 ↓ 田上ふじ

祖父 白木為直 ↓ 白木正道

④ 同胞

長姉 縫 ↓ なし（一人子）

（官吏 長谷川千蔵に嫁ぐ）

次姉 千代

(医師 福村亀二に嫁ぐ)

⑤死亡年月日

昭和二〇年六月二十九日

↓ 昭和五年暮れ

⑥死亡地

門司

↓ 小倉

⑥死因

米軍の爆撃による死

↓ 病死

これを見ても明らかだが、清張は、耕作の生没年、生誕・死亡の場所、死因を変更、十四歳で父を亡くしてから保護者的役割を果たした二人の姉や義兄の存在を伏せ、母一人子一人の設定としているのである。特に生年を自分と同じ明治四二年に変更したことは留意すべきことである。

『松本清張全集』三五巻の「解説」で、桑原武夫氏は

田上耕作というみじめな肉体と明敏な頭脳をもった人物は、作者の住んでいた小倉では有名だったが、松本がさる記者にもらしたところによると、作者は会ったことがなく、また耕作の書いたものは残っているはずだが、その所在も知らず、もちろん読んだこともない。ただ作者は、耕作がたどったであろうと想像される道すじを自分自身で歩いて調べたのであって、耕作の筆としてここに出ている文書は、作者の創作なのだという。鷗外の著作をふまえての綿密な現地調査自体がた

いへんな努力であったにちがいないが、むしろ見事なのは、作者松本と作中人物耕作の相即、調査しながら書き、創作を進めるために調査するという関係の成功である。

と述べている。

〈耕作がたどったであろうと想像される道すじを自分自身で歩いて調べたのであって、耕作の筆としてここに出ている文書は、作者の創作なのだ〉というのは、ほぼ間違いないことであろう。清張は「運不運 わが小説」(『過ぎゆく日暦』一九九〇年四月 新潮社所収)の中で、同様の発言をしている。ただ、耕作と〈会ったことがなく、また耕作の書いたもの〉の〈所在も知らず、もちろん読んだこともない〉というのは、俄かには信じがたい。「読書の友」六六号(日本共産党中央委員会 宣伝文化教育部発行 一九六三年五月二五日付)の座談会「真実と文学を語る松本清張」中、清張は〈あの主人公が実在しているのを実際に見たわけですよ。〉と語っている。「或る『小倉日記』伝」の江南鉄雄のモデルであり、耕作の親友であった阿南哲朗氏と清張は旧知の間柄で、耕作に関する多くの情報を彼から得ていたと考えられる。『朝日新聞社時代の松本清張』(九州人文化の会 一九七六年七月)の著者、吉田満氏は、〈松本さんは或る小倉日記伝を書くために、生前の田上氏と親交のあった当地の児童文学作家の阿南哲朗氏の自宅に日参しておりまして。〉と証言、また、安田満氏は清張が署名して阿南氏に献呈した、芥川賞受賞作品掲載の「文藝春秋」を「松本清張展」(一九八五年)

で見て、「田上耕作の事蹟は阿南氏から聞いたものと確信した」²³という。

阿南哲朗氏は、「公孫樹は高く芳し」（「記録」一〇冊 特集〈曾田共助翁の思い出〉一九六四年七月 小倉郷土会）の「或る『小倉日記』伝」の中の曾田先生」と題した文中に〈この白川慶一郎とは曾田恭助先生のこと、清張氏は小倉在任時代、よく曾田邸に入りしていたので、曾田先生のことも熟知していたので、この一文にも昭和初期の曾田先生の身辺状況が、躍如としている。〉と述べている。「珍妙魚町散歩風景」と題した文では、妻や〈美人揃いの看護婦連をつれて〉の曾田の散歩の様子が描かれている。〈耕作が、長身で口を半分あけて、不自由な足を引きずって、ついてゆくのだが、時にはフンドシをたらし、それを下駄で踏み踏み歩いてゆくこともあった。〉〈道ゆく人から失笑され〉ても気にせずへいっつも田上耕作と私を連れて歩いた。〉とある。「或る『小倉日記』伝」の四章の描写などは、この阿南氏の回想に拠るのだろう。

清張自身が〈曾田邸に出入りしていた〉のであれば、曾田が世話をとつめた「小倉郷土会」の活動を知らないはずがない。その機関誌であった「豊前」の名を作中にあげながら、それに収められている耕作の文章を読まないとは考えにくいではないか。阿南氏から耕作が書いたものの紹介もあつたはずである。藤澤隆文氏の「記念会研究ノート『清張と鷗外』展のねらい」（松本清張研究）創刊号二〇〇〇年三月 松本清張記念会）によると、その後の調査によって清張が戦後再興された「小倉郷土会」の会員であつたことが確認

されたとある。それなら、当然「豊前」の内容は知っていたであろう。

では、清張が自身の〈創作〉だという、作中の調査はどのように行われたのか。

山崎氏の前掲論文中に、〈轟良子氏が耕作の甥の福村恭一氏を訪ねた折、同氏は「松本さんは、母の所に聞きにきましたよ」と語った²⁵〉と記している。この轟氏の記述は、耕作の死亡時期や死因を清張が知っていたということだけでなく、清張の取材の実際を知る手がかりをも示している。つまり清張は面識のあつた阿南氏だけでなく、耕作の関係者に直接取材していたことである。福村恭一氏以外に取材対象となつたと明らかかな人物として、前述²⁶の耕作の親友、原稿を預かつたという延本一雄（白水）氏、鷗外の鍛冶町の旧居の家主、〈幼児の頃鷗外に菓子など貰つて、可愛がられた〉という宇佐美の老夫人、鷗外のお気に入り（〈西洋料亭〉「三樹亭」の姉妹のうち妹の徳氏を挙げることができる。延本氏を除き、岩波書店の第二次『鷗外全集』月報二五 第二五巻付録（一九五三年六月）に「私註「小倉日記」と題して清張自身が取材したと書いているのである。徳氏は〈当時十四五位〉だったため、〈酒はあまり召上らなかつたといふ以外何の話もきけなかつた。〉という。ここには、鍛冶町の旧居の間取り図（清張によるかどうかは不明）や、取材源は書かれていないが東禅寺²⁷で開かれていた禅の会のこと、その会員の名を記した魚板があつたこと、鷗外の婢元や三樹亭の姉娘のその後についても報告されている。他に玉水俊斌夫人のハル氏、

「或る『小倉日記』伝」に「福岡日日新聞」の小倉支局長として登場する麻生作男氏、同じく八章に名の挙がっている安広伴一郎の甥実六のモデル、安広戌六氏には当然取材したであろう。更に曾田共助をはじめ、そのサロンに集った小倉郷土会のメンバー岩下俊作、劉寒吉、横山白紅諸氏も取材対象だったかもしれない。

こうした足を使った関係者への取材、鷗外の立ち寄った場所への調査を行う一方、清張は、鷗外関係の文書資料を参観している。先ほど挙げた「私註『小倉日記』」には、「小倉日記」や「門司新報」、「鷗外全集」の「月報」が引用され、清張の参照した資料の片鱗が示されている。「或る『小倉日記』伝」を読めば、鷗外の小説・小倉時代に当地の新聞に発表された文章は勿論のこと、鷗外の周辺の文学者（例えば、作品冒頭のK・M、即ち木下柰太郎はいい例であろう。）の著述にも目を向けている。「門司新報」「福岡日日新聞」だけでなく、小倉周辺の郷土誌「豊前」「福岡」も視野に入っていただろう。

しかし、清張が「或る『小倉日記』伝」執筆時に最も活用したのは、岩波書店の第二次『鷗外全集』の「月報」だったのではないか。小倉時代の鷗外に関連するもの（昭和二十七年一月〜二十八年一月）を次に挙げる。

- 「月報」八（三〇巻附録） 森類 「小倉日記」
麻生作男「小倉の森先生」
「月報」十二（二二巻附録） 稲垣達郎「小倉時代についての雑文」

「月報」十五（二巻附録） 大原美治「小倉時代と鷗外のイロ
ニ」（上）

「月報」十六（九巻附録） 大原美治「小倉時代と鷗外のイロ
ニ」（下）

「月報」十八（三一巻附録） 岡崎義恵「十人の婢——『小倉日記』
に現れた女性——」

「月報」二〇（十六巻附録） 森於菟「小倉と小倉日記」
岩下俊作「鷗外先生と小倉の人々」

前述したとおり、清張自身「月報」二五（二五巻附録）に「私註『小倉日記』」を寄せているのだが、その中で右の（岡崎義恵氏の「十人の婢」）に触れている。また、三樹亭の姉妹のことを挙げ、〈當時先生と親しかつた麻生作男翁の話である。〉と書いているのだが、それは右の麻生作男氏の「小倉の森先生」に拠ったものかもしれない。「或る『小倉日記』伝」一〇章の麻生が語る内容は、麻生氏の「小倉の森先生」と重なる点が多い。鷗外と〈お近づき〉になったきっかけが〈柳河藩〉の古記録の紹介にあったこと、〈公私〉の別の厳格であったこと、〈三樹亭〉では一人ではなく必ず姉妹を呼んでいたこと、送別会の発起人戸上駒之助が小倉市立病院院長、柴田薫之が開業医であったこと等、がここに記されているとおりである。更に、森於菟氏「小倉と小倉日記」も参照した痕跡がある。この森於菟氏の文章は、「小倉日記」の全集収録を機に〈鷗外熱〉が上昇、〈二つの旧居跡の門前に石標を建てる〉ことになり、その除幕式のために

小倉に赴いた時のことを記したものである。この中で於菟氏は、小倉市役所が発行した『小倉』（一九五〇年五月）に触れ、鷗外の新婚の〈妻の詠んだといひ伝へられる和歌なども紹介されて〉いると書いている。「或る『小倉日記』伝」の七章にあるしげが詠んだという歌が、「三田文学」と「文藝春秋」で異なっていることは前述したとおりだが、この『小倉』一三一ページ所載の〈和歌〉がそのまま「文藝春秋」に採用されているのである。表記一つ違っていないところを見ると、これが取材源であろう。於菟氏の文章が掲載された「月報」は昭和二八年一月、「文藝春秋」は昭和二八年三月発行であるから、時期的にも齟齬はない。『小倉』というタイトルだけでは、鷗外の〈妻の詠んだ〉〈和歌〉が載っているとは想像できない。於菟氏の「月報」での紹介があったからこそ清張は手に取ったであろう。これなども、清張にとって「月報」が貴重な情報源であった一つの証左ではなからうか。

では、こうした取材・調査を経て、清張はどのように耕作の生涯を作品化していったか。実在の耕作との相違から考えてみたい。轟良子氏は、〈体にハンデいこそあったものの、決して暗鬱一点ばかりではなかった〉耕作の、〈陽のあたる部分を意識的に削除したのではないだろうか〉²⁸と述べている。轟氏の言う〈陽のあたる部分〉とは、小倉での鷗外研究者としての社会的な評価であり、外部に積極的に働きかける耕作の活動そのものであろう。三節で見たように、実際の耕作は、鷗外旧居の標木を建て、潤三郎氏に自ら写真を送り、

「鷗外全集」の編輯部に物申す人物である。清張が潤三郎氏の著作を挙げながら、旧居の標木の件には触れず、実際には書かれていないベルTRANを持ち出したのも、社会に対して積極的・行動的なイメージを主人公に付与することを忌避したためであろう。確かに〈意識的〉な〈削除〉が行われているのである。

山崎一穎氏は、〈小説中の田上耕作像は清張その人に近づけている。明よりも暗に、光よりも影に焦点を絞って造型していく清張文学の原点がここにある〉²⁹と述べている。大塚美保氏も〈小説中の耕作像は、清張の一定の意思の下に造型された、かなり虚構性の強いものと見ることができると言える〉

一定の意思とはどのようなものか。それは次の二つのキーワードで表せるように思われる。〈自己像の投影〉と〈不遇〉である。（略）生没年の操作・変更にも顕著だが、小説中の耕作は、作者清張と多くの条件を共有する主人公として設定されている。小説中の耕作が自分と鷗外との間に、（略）パセティックな共感を感じているのと同様に、清張から耕作に対して、ある種のパセティックな一体感が投げかけられていたことがうかがえる。

と指摘している。³⁰なるほど作中の耕作は〈清張その人〉〈自己像〉と近似している。清張の実体験―客観的な評価を求めて木々高太郎

へ作品を送付したことは冒頭のK・Mへの手紙に、朝日新聞西部分社時代の上司に「そんなことをしてなんの役に立つんや？」と言われたことは東の言葉として作品に生かされ、へこんなことに意義があるのか」という疑問となつて繰返し耕作を襲う。親友も気付かない自分の身体についての絶望・煩悶も、清張によって付与された。

「半生の記」の「濁った暗い半生であつた」というのと同様の沈んだ色調が、「屈託のない」耕作の上に投げかけられているのである。

では、大塚氏のいう〈不遇〉の実態とは何か。身体的なハンディが根本にあることは言うまでもないが、清張は周囲の白眼視・無理解を執拗に描き込んでいる。K・Mの激励や森潤三郎からの依頼・著書への記載という喜びも描かれてはいるが、これらは、へこんなことに意義があるのか」と煩悶する耕作に調査を続けさせる、一種のカンフル剤の役割を担うもののように思われる。現在の耕作が獲得していた社会的な評価は作中では殆ど拭い去られ、僅かに一〇章の〈新聞記事〉となつたという記述があるだけである。しかも、この開き始めた社会との扉は戦争の激化によって、たちまち閉ざされることになる。そのように清張は描いているのである。つまり、対世間・対社会的な要素を〈不遇〉の原因として強調していることとである。そして、その社会的〈不遇〉のマイナス面を個人的なレベルではあるが、補うものとして造型したのが、耕作の杖とも通訳ともなつて献身的に支える母の存在である。パトロンの杖とも通訳、生涯の友江南も母に準ずるものであろう。

しかし、〈不遇〉を強調するならば、戦争中に米軍の空爆で亡く

なり、後を託した渾身の鷗外資料が散逸してしまつた、という事実の方がはるかに強烈な要因となり得るのではないのか。清張はこの事実を用いず、耕作を鷗外に親しませるきっかけとなつた、伝便の鈴の音の中で母に看取られ、静かに永眠させている。ここには、身体的なハンディや意義を疑う煩悶を抱えながらも、どうしても鷗外の調査を続けたいと願う耕作の内的な欲求に対する、清張自身の共感がある。世間に認められるためではない、自分自身の中に沸き立つ、押さえきれない興味が原動力なのである。そして、それこそが、彼の存在意義を証明する唯一のものであつたのである。耕作が遺した風呂敷包みは、母によって命を承らえた、そう書くことは、せめてもの耕作への鎮魂であつたのだろう。

更に、清張の創作の手法として、最後に付加えたいのは作品の展開の仕方である。作中、鷗外の小倉時代に取材した小説や地元紙に発表した文章、K・Mの鷗外に関する文献、『鷗外全集』の「後記」等々、多くの文書資料が登場するが、耕作はそのものを分析・研究する方向には進まず、その文書から自分の次の行動の手がかりを得ようとする。例えば、地元紙に発表した文章を見て、鷗外の原稿を取り次いだ支局の人物を探そうとする、といった具合にである。作中、耕作はひたすら鷗外のゆかりの場所、ゆかりの人々を探訪して話を聞いている。へどんな片言隻句でも「採集」しようとするこの方法は、重信幸彦氏によれば、〈柳田の構想と意向〉とは異なる〈他ならぬ小倉郷土会が実践してきた〉手法なのだといふ³³。更に、

注意したいのは、この〈採集〉が連続して、作品のストーリーを形成していることである。

一つの調査によって、また次の扉が開いていく。例えば、広寿山の住職に、鷗外が〈禅にも熱心だった〉ことを聞き、東禅寺の存在を知る。東禅寺では、寄進者の名を記した魚板を発見して、調査が大きく前進するというように、謎を徐々に解いて、次の謎を解く新たな手がかりを得るのである。初出「三田文学」では、最初に訪ねるベルトランに鷗外のこととして「ブッキョウウノのゼンガク」を挙げさせていたが「文藝春秋」では削除している。禅への関心が判明するのは、東禅寺訪問の直前でなければ謎解きの道すがら、前後してしまふからであろう。これはまるで推理小説の「謎とき」の手法である。そういえば、桑原武夫、田中実両氏もこの作品を「推理小説」と呼んでいる。そして、この手法は奇しくも鷗外の「史伝」の方法に通じているのである。

沼野充義氏は鷗外の「渋江抽斎」「伊沢蘭軒」「北条霞亭」等の史伝は、〈鷗外本人による「謎とき」の(略)プロセスをそのまま作品化したもの〉³⁶だと言う。丸谷才一氏もまた、この鷗外の史伝三部作は、『ハドリアヌス七世』の著者フレデリック・ロルフの伝記を書いた、A・J・シモンズの手法だと指摘している。〈その探索と考証の過程がそのまま語られて、ロルフの伝記になっていく〉〈すなわち探偵的方法による伝記〉である。鷗外の史伝も同じ〈文学的伝記探偵の方法〉によるのだというのである。³⁷

鷗外は『観潮楼閑話』³⁸の中で、史伝執筆について次のように述べている。

何故に伝記を書くかと云ふに、別に廉立つた理由はない。わたくしは或時ふと武鑑を集め始めた。そして昔武鑑を集めて研究した人に渋江抽斎のあることを知った。それから抽斎が啻に武鑑を集めたのみでなく、あらゆる古本を集めて研究したことを知った。それからその師友(略)を知った。わたくしは此人々の事蹟が(略)殆ど世に知られてゐぬことを知った。そしてふとその伝記を書き始めたのである。(略)此等の伝記を書くことが有用であるか、無用であるかを論ずることを好まない。只書きたくて書いてゐる。

「伊沢蘭軒」の終わりに記したように、鷗外は〈学界の等閑視する所〉であろうと、〈自家の感動を受くること大なる人物〉を著作の対象としたのである。〈殆ど世に知られてゐぬ〉人々の事蹟はこうして現在に伝えられた。塩谷贊氏は、〈渋江抽斎〉も「伊沢蘭軒」も「北条霞亭」も鷗外によって死後の生命を得た人々たちである。〈と述べている。³⁹

史伝と小説は同一には考えられないであろう。が、田上耕作もまた、清張によって〈死後の生命を得た〉一人だったのではないだろうか。

以上、清張の手法について述べた。こうしてみると、清張が忠実

な「田上耕作」伝を書こうとしたのではないことがよくわかる。

宿痾のために就職も結婚もままならなかった耕作にとって、鷗外の事蹟調査は、生き甲斐といった生ぬるいものではなく、自らの存在意義を確かめる行為であった。清張が作中の耕作に付加した闇の部分、親友にも理解されなかった煩悶は、存在意義という光を希求せざるを得なかった彼の人生を浮き彫りにするために不可欠なものだったのではなからうか。

作品の最終章、伝便の鈴の音の描写の直前に、病状の〈停顿〉した耕作が、床に腹這いながら、〈風呂敷包みに一杯〉の〈自分の書いたもの〉を見る場面がある。清張はそれを〈足で歩いて蒐めた彼の「小倉日記」だ〉と記している。これは「文藝春秋」で加筆された一文である。清張が、右に挙げたような様々な手法を駆使して描こうとしたのは、まさに〈足で歩いて蒐めた〉、「耕作ならでは」の「小倉日記」なのであった。それはまた「清張」の「小倉日記」と言い換えてもいい。この作品のタイトルが「田上耕作伝」ではなく、「或る『小倉日記』伝」である所以はここにあるのであろう。

おわりに

最後に、鷗外の「小倉日記」の発見によって、耕作の行為が〈一文の価値も〉なくなった⁴⁰という清張の発言について考えてみたい。確かに、大塚美保氏の前掲論文にあるように、清張は同様の発言を繰り返している。作中のK・Mの激励の手紙は、注意して読めば、

〈小倉日記が不明の今日、貴兄の研究は意義深い〉とある。「小倉日記」が〈不明〉でなくなれば〈意義〉が揺らぐとも読めるのだが、果たして本当に〈採集記録〉より〈文書史料〉を〈優位〉に置いて考えていたのであろうか？ 筆者は清張作品全般を精査したわけではないが、少なくとも『画像・森鷗外』に至る数多くの鷗外関連の著作の手法や姿勢を見る限り、到底そうは思えないのである。〈錚々たる研究者の誰一人として、渋江抽斎の墓を訪ねたことがないようだ〉と異議を唱える人である。「自分の足で確かめる」こと―〈採集記録〉の重要性は十分に自覚していたはずである。

耕作の調査が水泡に帰したと発言することは、自らの文学意識の吐露などではなく、一般の読者に向けて、耕作の〈不遇〉を強調してみせる清張ならではの言辞であったように筆者には思われる。作中、耕作の上に〈不遇〉のイメージを付加した、その延長上の発言である。鷗外研究者や愛好家であれば、鷗外の「小倉日記」の〈記述が簡潔〉で空白の部分の多いものであり、〈採集〉した情報⁴¹によって、その空白が埋められる可能性の高いものであることは周知のことであろう。しかし、「小倉日記」が全集に収められても、一般の読者が手に取る機会は少ないだろう。そんな読者にとっては、『或る「小倉日記」伝』中の耕作の辿った足跡がそのまま「小倉日記」の内容として受けとめられるはずである。それが、本物の出現によって、全く無意味なものとなった、と伝えることは、〈不遇〉な耕作像を一層強烈に印象づけることになったであろう。

清張は、作品の末尾に、耕作の死から二か月後、東京で「小倉日記」が発見されたことを記す。これを受けて、続く最後の一文が〈田上耕作が、この事実を知らずに死んだのは、不幸か幸福か分らない。〉である。〈芥川龍之介の「羅生門」の末尾の一文と張り合うだけの文学的強度を内在させている〉この文については、小森陽一氏、田上実氏の言及があるが、もはやこれについて述べる紙数は残されていない。ただ一つ言えるのは、作中の記述を實在の耕作の紛れもない伝記と捉えている読者、作中の虚構を熟知している読者、「小倉日記」をも比較検証の対象にしている読者、あらゆるレベルの読者に対して、この最後の一文は、新たな読みの地平を要求するものだとすることである。耕作が〈死後の生命〉を得たと前述したが、この一文の果たした役割は大きいであろう。

注記

- 1 本稿では、初出「三田文学」との比較の必要から「文藝春秋」掲載本文を底本として用い、『松本清張全集』三五卷（一九七二年七月 文藝春秋）を参照した。尚、引用文献が旧字体使用の場合、仮名遣いはそのまま、漢字に関しては新字体に変換した。
- 2 『西郷札』の「ころ」の中で名が挙がっているのは木々だけだが、清張は大仏次郎・長谷川伸にも送っているようである。郷原宏氏は、この木々の返信の葉書中、「ありがたく」は「ありがたう」、「話しても」は「話して」、「本格」は「この種」であるの

を清張が読み違えていると指摘している。「清張とその時代」二〇〇九年十一月、『乱歩と清張』二〇一七年五月、ともに双葉社）確かに、慶応義塾大学医学部の教授である傍ら、「探偵小説芸術論」を推奨していた、つまり「文学派」の実作者であった木々が、対立する乱歩らの「本格もの」を薦めるはずがないのである。

- 3 テレビ番組での郷原宏氏の発言。郷原宏氏は元週刊読売、読売新聞出版局の編集者、清張の担当であった。
- 4 初出「三田文学」の〈全文に手を入れ〉たという「文藝春秋」本文であるが、これが決定稿ではなく、『松本清張全集』三五卷では、更に手が加えられている。
- 5 山崎一穎『「或る」小倉日記』伝』論 事実と虚構の交叉―（『鷗外』六〇号）
- 6 麻生作男が登場する「小倉日記」の日付は以下のとおり。明治三二年九月十一日、同年九月十七日、同年一〇月八日、明治三五年一月二一日、同年三月二一日。
- 7 『松本清張全集』三五卷では、〈つれて廻った〉の後に、〈耕作にとって白川に識られたことは一つの幸福であった。〉という一文が付け加えられている。
- 8 嘉部嘉隆「森鷗外雑記（三）」（『樟蔭国文学』三〇号 一九九三年三月）
- 9 大塚美保『鷗外を読み拓く』（二〇〇二年八月 朝文社）所収「松本清張『或る』小倉日記』伝―〈作者の意図〉を越えて―」

- 10 『小倉』の「鷗外と雲右衛門」の章に〈小倉における新夫人の
ことについてはあまり知られてゐない。ただ静子夫人が広寿山
にあそんだをりに詠んだ歌が伝えられてゐる。〉として、「文藝
春秋」掲載と同じ歌が記されている。〈静子〉とあるのは「し
げ」の誤り。藤澤隆文氏「『或る『小倉日記』伝』発想のヒン
ト 企画展「清張と鷗外」後日談」(「松本清張研究」創刊号
二〇〇〇年三月 松本清張記念館)に指摘がある。
- 11 轟良子『北九州文学案内』(一九九三年八月 私家版) 所収
「もうひとつの『小倉日記』伝」
- 12 岩城之徳「初期小説とモデル―『或る『小倉日記』伝』と田上
耕作」(『国文学』二八卷十二号 一九八三年九月)
- 13 浜田良祐「小倉のひとたち」(一九七一年五月 小倉郷土会)
- 14 岩下俊作「鷗外先生と小倉の人々」(第二次『鷗外全集』月報
十八 三二巻付録 一九五二年十一月 岩波書店)
- 15 「福岡」五九号(一九三五年十二月一〇日)
- 16 轟良子「田上耕作の鷗外顕彰」(「北九州森鷗外記念会だより」
二二号 一九九一年十二月)
- 17 小林安司「芥川賞前後の松本清張さん」(『西日本文化』二九三
号 一九九三年七月)
- 18 「豊前」は、曾田共助(『或る『小倉日記』伝』の白川慶一郎の
モデル)が中心となり、地元文化に目を向けるため昭和八年
に結成した「小倉郷土会」の機関誌で、昭和一〇年に創刊され
ている。或る『小倉日記』伝」にもその名は出て来る。戦争激
- 化により休止に追い込まれたが、昭和二十七年に「小倉郷土会」
は再結成、機関誌名を「記録」と改めたという。
- 19 半紙に毛筆で記された鷗外の手記。内容から小倉赴任の明治三
二年〜四〇年頃の筆録と見られる。東京大学図書館「鷗外文庫」
蔵。『鷗外全集』三七卷(一九七五年四月 岩波書店) 所収。
- 20 吉野泰平「松本清張『或る『小倉日記』伝』と『鷗外全集』
―「無名」の読者としての田上耕作―」(早稲田大学「国文学
研究」一八二号 二〇一七年六月)
- 21 安田満「情感をこめた声で読み聞かされて―小倉日記伝のころ―」
(『西日本文化』二九三号 一九九三年七月)
- 22 注12に同じ。岩城氏の論に拠る。
- 23 注21に同じ。
- 24 曾田共助(一八八五〜一九六三)は、九州大学で耳鼻咽喉科の
久保猪之吉に学び、大正五年、小倉市立病院の院長として小倉
に赴任して以来診療の傍ら地域文化の育成に尽力した。「公孫
樹」はその併号。
- 25 注11に同じ。
- 26 注17に同じ。
- 27 「小倉日記」に東禅寺の名がみえるのは、次のとおり。明治三
三年一月二六日〈金子と東禅寺を訪ふ。〉、同年十一月十一日
には〈釈文器碧巖を東禅寺に提唱すること、此日より始まる。
文器は片山氏に生る。東禅寺の住職なり。〉の記述がある。明
治三四年一月十二日、四月十五日、四月二〇日、四月二二日、

- は鷗外の愛用していた「略本暦」の欄外に「東禅寺」と記入。四月二〇日を除いて集合時間と思われる時刻も記されている。同年五月二十五日には、文器の近松門左衛門についての言葉が記され、一〇月七日には〈夜東禅寺に至るに、一人の会するものなし〉、明治三十五年一月二十九日には、急死した金窪という監督を〈東禅寺に葬る。〉とある。
- 28 注11に同じ
- 29 注5に同じ。
- 30 注9に同じ。
- 31 「平生の記」(一九六六年一〇月 河出書房新社)に東京商大出の上司から、考古学に興味を持つことについて言われた言葉として出ている。吉田満氏の『朝日新聞社時代の松本清張』学歴の壁を破った根性の人―(一九七七年七月 九州文化の会)にも同様の記述があり、この上司が「安井武夫」という名であることも記されている。
- 32 注5 山崎氏の論にある。
- 33 重信幸彦『採集』する身体へ―『清張』、小倉をして民俗学(『松本清張研究』八号 二〇〇七年六月 松本清張記念館)
- 34 桑原武夫「解説」(『松本清張全集』三五卷(一九七二年七月 文藝春秋))
- 35 田中実「小倉をめぐる清張と鷗外」(『松本清張研究』創刊号 一九九六年九月 砂書房)
- 36 沼野充義「解説「謎とき」のロマン―フィクションとノンフィクションの境界を超えて」(『松本清張全集』六四卷 一九九六年一月 文藝春秋)
- 37 丸谷才一『文学のレッスン』(二〇一〇年五月 新潮社) 鷗外の史伝がシモンズの方法で書かれ、時期的にはシモンズに先んじていることを、最初に指摘したのは、篠田一士氏だという。また、多田康廣氏は「『画像・森鷗外』私考―清張の採集法と鷗外史伝の叙法の接点を中心に―」(『松本清張研究』十六号 二〇一五年三月 松本清張記念会)の中で、〈清張の採集法と鷗外史伝の叙法は、類推法と廻行性において交叉する。しかし、清張は究極的に「なぜか」を思考し、鷗外は厳格的に「いかに」を重視する。〉と指摘している。
- 38 森鷗外「観潮楼閑話」(『帝国文学』二三卷一〇号 一九一七年一〇月・二四卷一号 一九一八年一月)
- 39 塩谷賛「死に対する鷗外」(岩波書店 第二次『鷗外全集』月報三一 三三卷附録 一九五三年十二月)
- 40 松本清張「運不運 わが小説」一九八九年一〇月十五日に東京小平市の松明堂書店で開催された、特別講演会の速記録に作者が加筆・再構成したもの。(『新潮四五』一九九〇年一月 後、『松本清張全集』六五卷所収。)
- 41 大塚氏の指摘にある。確かに、鷗外の日記は、〈簡潔〉で、人に読まれることを意識して書かれており、都合の悪いことは記していないように思われる。また、備忘録の要素の強いものである。鷗外は自らの再婚についても〈茂子を娶る〉(明治三五

年一月四日)の一行しか記していない。〈広寿山に遊ぶ〉とある明治三十五年二月二三日の項では、寺の匾額、廟、像等についての記述は詳しいが、妻を伴ったとは書いていない。小倉に伝わるという茂子の歌や、一里位は平気で歩くという茂子の健脚ぶりを伝えている同月二六日付の母宛て書簡をもって、妻同伴であったことが明らかになる。明治三十二年十二月二九日の原田直次郎の死、翌年二月四日の旧妻登志子の死を知った時の真情の吐露は、「小倉日記」では稀な記述といえよう。

42 小森陽一「松本清張の作家としての出発―初期作品の可能性の射程―」(「松本清張研究」十四号 二〇一三年三月 松本清張記念会)

43 田中実「『事実』の意味を問う清張―『或る「小倉日記」伝』の深層批評―」(「松本清張研究」十五号 二〇一四年三月 松本清張記念会)

補足「或る『小倉日記』伝」清張の記述と事実との相違点

① 第五章 《鷗外全集》第二十四巻後記は、鷗外の小倉時代の日記の散逸したしだいを載せている。↓ その「後記」があるのは「第二十巻」。

② 第六章 《満州で年を越して私が凱旋した時には、安国寺さんは

もう九州に帰つてゐた。小倉に近い山の中の寺で、住職をすることになったのである。(二人の友) ↓ 鷗外自身がこのように書いているが、厳密には、鷗外が凱旋した明治三十九年(一九〇六)一月、安国寺さん(玉水俊斌)は現 山口県防府市の三田尻にあった第四

中学校の教頭をしていた。小倉の山の中の寺 護聖寺に入ったのは、同年三月。この時、片山ハル(二三歳)と結婚している¹。ハルは明治十六年か十七年(一八八三か一八八四)の生まれだろう。玉水俊斌の生没年は(慶応二)大正四、一八六六(一九一五)なので、年齢差は十七〜十八歳である。

第六章

《玉水アキはこのとき六十八歳》 ↓ 「このとき」がいつであるかによるが、四章の終わりにある「昭和十三年(一九三八)ごろ」であるとすれば、五四〜五五歳のはずである。俊斌が存命であれば七二歳、それにふさわしい年齢が設定されたか、あるいは清張が取材した(昭和二六年頃か)当時の六七〜六八歳という年齢をそのまま用いてしまったか、のいずれかであろう。

③ 第七章

《鷗外はこの家から新魚町の家に移った。》 ↓ 鷗外の「独身」の中にも「新魚町の大野豊の家に二

人の客が落ち合った。」とあるのだが、鷗外が実際に移り住んだ当時の町名は「京町」である。鷗外の書簡の住所も「京町」となっている。その後、町名変更が行われ、「新魚町」と改められたようである。変更の時期は確認できなかった。鷗外が「独身」を発表した時点（一九一〇年一月）で、既に変更されていたのかもしれない。実在の田上耕作の書いた「鷗外漁史の小倉観―広告塔と伝便」（一九三五年二月）でも「新魚町」となっている。森村菟氏の「小倉と小倉日記」（岩波書店 第二次『鷗外全集』月報二〇 十六卷附録 一九五三年一月）の中に、〈新魚町の邸趾といふのは旧名京町で、昔の遊郭に近くその師鼓がきこえた場所である。〉とある。

④ 九章

『鷗外全集』を見ると、鷗外が小倉時代に書いて地元紙に発表したのは次の通りだ。と、五編を挙げている。

↓ 実際には七編ある。太字で示したものが欠けているもの。

「我をして九州の富人たらしめば」（明治三二年九月十六日「福岡日日新聞」）

「鷗外漁史とは誰ぞ」（明治三三年一月一日「福岡日日新聞」）

「小倉安国寺の記」（明治三四年一月一日「福岡日日新聞」）

「小倉安国寺古家の記」（明治三四年一月一日「門司新報」）

「即非年譜」（明治三五年一月一日「福岡日日新聞」）

「和氣清麻呂と足立山と」（明治三五年一月一日「門司新報」）

「再び和氣清麻呂と足立山と」（明治三六年一月五日「門司新報」）

清張は『鷗外全集』を見ると書いているが、岩波書店の第一次『鷗外全集』一八卷（昭和十二年八月）、第二次『鷗外全集』一三卷（昭和二十六年十二月）には、「即日年譜」を除く六編が収められている。作中、〈和氣清麻呂と足立山と〉「再び和氣清麻呂と足立山と」――明治三十五年 門司新報とまとめて書いているが、後者は鷗外が小倉を離れた翌年の発表である。齊藤茂吉の「後記」には「小倉安国寺古家の記」の掲載日は不明と記されているが、「再び和氣清麻呂と足立山と」の掲載日は正しく記載されている。

⑤ 一〇章〈独身〉に出でくる「病院長の戸田」、「裁判所の富山」

はこの人達（筆者注 東禅寺の魚板に名のあった人達）がモデルであろう。

↓ 「独身」の登場人物名が違う。「独身」では、市病院

長は「富田」、裁判所長「戸川」という名である。また、東禅寺の魚板に名のあった「戸上駒之助」は作中麻生が言うように「市立病院長」であるが、耕作が〈思い当〉たった「独身」に出て来る病院長のモデルではない。「独身」の二章で、鷗外は「富田」を次のように紹介している。

一人は富田といふ市病院長で、東京大学を卒業してから、此土地へ来て洋行の費用を貯へてゐるのである。費用も大概出来たので、近いうちに北川といふ若い医学士に跡を譲つて、出発すると云つてゐる。

この「富田」のモデルは澄川徳（一八六一―一九二六）。明治二二（一八八九）年より小倉病院長をつとめ、明治三四（一九〇一）年、ドイツに留学。帰国後、福岡県若松町に開業、明治三九（一九〇六）年広島病院長となつた人物である。「独身」の近いうちに洋行する、という記述とも合致する。魚板に名のある「戸上駒之助」は、その澄川の洋行出發後、市病院長となつた人物。「小倉日記」明治三四年九月七日に、〈戸上駒之助東京より至る。市病院長となれるなり。〉とある。因みに「独身」の裁判所の「戸川」のモデルは、魚板に名のあった「上川正一」で間違いない。作中、麻生も「小倉裁判所の判事」と述べている。

⑥ 一〇章〈昭和二十六年二月、東京で鷗外の「小倉日記」は発見

されたのは周知の通りである。〉

↓「小倉日記」の発見は二十六年三月である。山崎一穎氏の『或る「小倉日記」伝』論「事実と虚構の交叉」』（鷗外）六〇号 一九九七年一月）に紹介されているように、「夕刊毎日新聞」（昭和二十六年三月十五日）に「小倉日記」発見の記事が掲載されている。なお、第二次『鷗外全集』（岩波書店）月報八 第三〇巻附録には、森類氏の「小倉日記」と題する文章が載っている。これによると、〈実は「小倉日記」なども随分前に発見した。大体昭和十五年頃であつたらう、発見はしたが、それが未発表の日記とは知らなかつたから、一人大切に保存して置いた〉のだそうである。岩波書店の第一次『鷗外全集』は昭和十一―十四年刊であるから、十五年に発見されていても掲載は無理だったかもしれないが、もし掲載されていたなら、清張が語るように、田上耕作による鷗外の事蹟調査もなく、清張の『或る「小倉日記」伝』の執筆もなかつたかもしれない。

注記

- 1 山崎一穎『鷗外ゆかりの人々』(二〇〇九年五月 おうふう)
- 2 大塚美保『鷗外を読み拓く』(二〇〇八年八月 朝文社)に同様の指摘がある。
- 3 松本清張「運不運 わが小説」(「新潮四五」一九九〇年一月後、『松本清張全集』六五巻所収)。